建築論研究　第２号（2020）pp.080－088

都市の暴力性、あるいは愛着について

千代 章一郎　島根大学学術研究院環境システム科学系

1.「都市」と都市論

「建築」とは何か、という問題設定は建築論の初動を誘発する。「都市」とは何か、という根本的な問いもまた都市論の原点ではある。建築論は「ことば」を通して建築する。そしてまた、いわゆる哲学の思想と概念を援用して（あるいは詩を拠り所として）独自の理論的枠組みを構築する。一方で、都市論はさらに幅広く地理学・社会学・政治学・女性学などを参照することになり、論述の方法論は拡散の一途をたどる。はたして「建築」と「都市」を論じるまなざしの違いは、第一にその土地に占める領土の拡がりである。それは単に規模の大小、見える距離の長短の問題でない。

しかし実は、書物とは異なって、ものとしていずれ死を迎えるということについては、建築も都市も同じ宿命を背負っている。建築物は言うまでもなく、歴史的事実として、想像以上に都市の寿命は短い。そのうえ、建築物ほどではないにしても、集住を営むほとんどの都市は人種の構成・人口規模・社会体制を変えていく。「歴史都市」という概念は相対的なものに過ぎない。

人間が死を恐れてそこから逃れようとするように、都市は破壊の種となり得るすべてのものを遠ざけようとする。都市の人びとを囲う「壁」は、悪霊から、ペストから、敵の兵士から身を守る防御装置である。「壁」は破られることも運命づけられているが、自らの運命など知らないように生きていくことが都市生活の常態である。

その常態に亀裂を入れる契機が自然的災害であり、人為的戦争である。とりわけ戦争は、都市が防御的であればあるほど同時に破壊の標的となる。その現実が、遷都思想から20世紀の防空都市論に連なる都市論の基底を構成している。

とりわけ日本において、ある思想に基づいて都市が技術的に造りかえられるのは、こうした破壊に直面するときである。いわゆる近代の「都市計画」は、内発的に起こらない。たとえその芽があっても、枯れてしまう。大火や地震が「都市計画」を着工させる。あるいは中世までの白兵戦の形式は、水平的な標的を垂直的な標的に転換し、20世紀の戦略爆撃思想が都市を造る。こうした狂気の都市が持続するために必要なものは、眼に見えるか見えないか、垂直に立

ち上がるかどうかは別にして、まぎれもなく防御の「壁」である。

しかしながら、生活を営む都市の人間はすべてが兵士ではない(兵士はそこに住む人間でないこともしばしばである)。都市に生きる人間主体にとって、都市が内在する暴力性は別の意味にも繋がっている。それは暴力性とは真逆の愛着の感性である。両者の強度は反比例するどころか、表裏一体の関係にある。

2. 日本において都市計画を事業化させるもの

遊覧都市計画

『周礼』の中国都城を範型とする条坊制都市のなかでも、近代京都は多かれ少なかれ日本の都市の原型となり、平安京遷都の詔の「山川も麗しい」土地を強化してきた。はじめから「壁」はなく、羅城門の象徴性がかろうじて都市の境界を視覚化していた。

1919年の都市計画法に連動して独自に策定された「京都都市計画書」(1921)において掲げられた「遊覧都市」において、京都市は「歴史的遺跡及古代建築物ノ保存ニ努メ併テ訪客ノ観光ニ便ナル様」を企てた。歴史の偶然で遺された多くの資産をもって都市としてのアイデンティティを保証しようとしたのは、首都の座を奪われた危機感の反映でもある。「其の美を誇り以て今日に至りたるものなるを以て、其の特色を永遠に保持するは、京都都市計画上最も重要なるものとす」(京都都市計画風致地区指定理由書、1929)という発想は、世界大戦の時期にも変わらない。都市防空を目的とした全国の「緑地」指定でさえ、京都市の場合、周辺の山地の森林保全を目的としていた。死の影は薄い。

結果的に空襲を免れた京都市は、戦後に「京都国際文化観光都市建設法」(1950)の指定を受けて、「遊覧都市」を強化する。しかしながら、三山保全とは対照的に、一般的な市街地における開発の規制は、昭和31年(1956)の野外広告物条例制定や昭和47年(1972)の「京都市市街地景観条例」以外になく、住宅地供給や経済活性化の目的のために市街地において自然環境破壊を伴う経済開発が容認された。建築物の高層化抑制の特効薬はなく(むしろ公開空地という増強剤が与えられて)今日まで続いている。それは京都三山と都との歴史的なつながりの絶え間のない断絶と死を意味する。

軍事都市計画

世界的に見ても、例外的に存続してきた日本の都市が京都であるとするならば、例外的に破壊された都市の一つは広島である。

江戸期の城下町造営にはじまり、安芸国廣島藩は藩主毛利・福島・浅野によってつねに軍事都市として強化されてきた。その「町割」は京都・大阪を規範にしたといわれ、西国街道を引き入れることによって、文化を生成する「都

市」の装置を整えていく。全国共通の都市空間構成原理である。

明治維新後にも、基幹都市広島は城の廃城を免れ、城下町の構造は維持された。近代化によって城下町の構造を変えたものは、鉄道である。

まだ国の資本力もなく、国営の鉄道（山陽本線は日清戦争直前の1984年に開通）は国の兵商の動脈となる幹線事業であった。しかし、鉄道路線は中心部の城郭と接することはなく、注意深く回避されている。都市の中枢に置かれた軍事秘密に接触するわけにはいかなかったからであり、旧市街の保存という発想は皆無である。

さらに明治から大正にかけて、鉄道を補うために多くの都市で路面電車が開業した。現在の広島市の路面電車網は明治40年代から昭和10年代の約30年の間に民間資本によって建設され、戦前にすでに現在の姿がほとんど形づくられた。広島の場合、それは壕の衛生改善だけではなく、造船所などの軍需企業への工員の通勤や軍隊の輸送をねらいとしていた。軍事都市計画思想としては極めて明快である。

さらに1945年4月以降、日本本土の空襲が本格化して以来、日本の多くの都市が木造住宅の「建物疎開」を実施して空地や緑地をつくった（防災・防空のための沿線建物の取り壊しによる道路拡幅）。「緑地」はこのとき、明白に戦争の装置である。差し迫った生存のために空襲への対応が、都市の姿を内側から崩壊させた。

平和都市計画

1945年8月6日、広島の都心部の原爆が投下され、14万人近くの命が犠牲になり、街はすべて全壊全焼した。全国において戦災を受け、被害の大きかった115都市の復興については、昭和20年12月30日、『戦災復興計画基本方針』が閣議決定された。広島市においての戦災復興都市計画の大きな特徴は、市中心部においてそれまで大規模に実施されたことのなかった土地区画整理という方法を採用し、市街地の抜本的な整備を図ろうとしたことである。

こうして1949年、『広島平和記念都市建設法』が策定され、平和記念公園の整備、幅員100mの平和大通り、河岸緑地の整備の三大事業の基盤整備が行われ、戦後の広島市の都心構造を決定づけることになった。しかしよく見てみると、三大事業以外に、抜本的に都市のインフラを変更するものはない。したがって、現代の広島は江戸時代から始まる「軍事都市」の骨格を大きくは変えていないともいえる。このことは、日本の都市計画における「土地区画整理」の困難さを物語っている。個人土地所有の神話が根強く、税制がそれを助長した結果、換地は解けないパズルを組み立てるに等しい。

こうした都市構造の読み替えに、「軍事都市」の痕跡は見当たらない。1949年に募集された「広島平和記念公園」の設計競技の与件においても、慰霊の場さえ求められてはいない。しかし応募した丹下健三は違っていた。

「私たちが考えた広島のコミュニティ・センターは、しかしきわめて特殊なものであった。それは広島市民生活再建の中核的な施設であるばかりではなく、さらに、あの広島の記憶を統一のある平和運動にまで展開させてゆくための実践的な機能をもった施設であって、それに加えて、記念塔のごときものの必要を認めなかったのである。

しかし、そのような判断にもかかわらず、私の心情は、迷わざるを得なかった。慰霊堂を含む記念塔を、広島の人びとが求めていることのなかに、意味があるように思えるのであった。無垢の犠牲者を、父や母や、妻や子にもつ広島の人びとの願いにたいして、何か慰霊し、祈念するための施設を、ささやかなものであるにしろ、もちたいと感じたのである。これが、私たちの答であった。」(丹下健三、「廣島計画(1946～1953)」、『新建築』、1954年1月)

丹下健三は、平和を過去の慰霊と未来の創造の半ば両義的な性格において読み取った。丹下健三ははじめ、西洋中世の自由都市における市民の自発性によって建設される広場を新しい時代の「コア」の理想としたのであるが、あえて場所の特異性に向かい合わないわけにはいかなかった。公園の中心に慰霊碑を置き、その軸線上に原爆ドームを視覚化した案を提出したのは丹下だけであり、いわば丹下によって原爆ドームが発見されたと考えることもできる。

しかし当時、いつの頃からか「原爆ドーム」を呼ばれるようになっていたこの建物は、取り壊しを前提とした議論が主流であった。破壊がもたらした精神的苦痛の持続は根が深い。永久保存が広島市によって決定されるのは、1966年のことである。丹下の構想が曲りなりに実現してから、すでに多くの年月を経てからのことである。

一方で、戦後の都市開発の波に揉まれて、広島では軍事施設を含む被爆建物の多くが取り壊され続けている。補助金制度の未整備という制度上の問題だけではない。厄介なのは、刷新こそが「平和」であるという戦後の論理である。暴力的な経済成長の論理は、それ自体「平和」の論理ともなる。抹殺された都市の記憶の根は複雑である(唯一興味深いのは、身体の鍛錬の場であった西練兵場が戦後プロスポーツの「市民」球場になったことである)。

都市内に作動したこの暴力性は、物理的な抹殺だけではない。広島市は1970年代より景観行政を積極的に推し進め、戦後復興の遺産を活かした「水と緑の都」のイメージ戦略を打ち立てている。戦争遺産の活用、土地の高度利用、自然環境保護、それら全てが盛り込まれて、「平和都市」のイメージが描かれる。論理構造としては、京都市の「遊覧都市」と同じである。

失われていくものも京都市と同じである。広島市においても、高層化によって戦前のようなランドマークとして被爆建物を視認することは困難となり、都市空間的な連続性を著しく欠く結果を招いている。広島市は1981年の「広島

市都市美計画」を策定して以来、屋外広告物などの規制の取り組みを続け、1996年には原爆ドームの世界遺産登録にこぎ着けた。しかし内実は、バッファーゾーンの設定に周辺民地の利用制限をかけずに民間との合意が形成されたために、原爆ドーム周辺に乱立するマンション景観を生む結果になった。こうしてポケットパーク化した平和記念公園に孤立するドームは、鑑賞の対象として檻に入れられた希少動物のようでもある。

3．暴力に対する建築の履歴と「市民」

29世紀的破壊

たしかに、戦災範囲や被災者の数だけを指標にすると、再三の空襲を執拗に蒙った100を超える日本の都市よりも、広島が突出しているとは言えない。しかしながら、原子爆弾は都市の破壊のプロセスを極小化する。都市空間の変化は瞬時的である。昨日まで広島市内からは見えなかった瀬戸内の島々の風景が次の瞬間にはパノラマ景として出現する（黒煙ですぐには見えなかったのであるが）。そして何より、その未知の兵器による身体の死の恐怖の持続は、そこで生きてきた人間には経験しようもない恐怖を呼び起こした。

しかしながら、灰燼に帰した都市の場所そのものまでもが破壊されたわけではなかった。なかでも、広島城（伝統的名所）と原爆ドーム（近代化の名所）は、場所の持続性という意味では象徴的な場所である。

広島城

毛利輝元によって1598年に築城された広島城の天守閣は大天守閣の威容を誇り、平城として革新的な都市の姿を出現させた。近代においては日清戦争時に大本営が置かれた軍事施設の中枢であった。伝統的な祭りが精彩を欠いていった一方、毎年十月には戦没軍人を祭る大規模な「広島招魂祭」も開かれていた。それでも二回の大きな博覧会や物産共進会、建国祭や広島国民大会などの催しが次々と開かれた。政治的象徴である場所は、同時に階級を超えた「市民」に愛される場所でもあった。

被爆時、木造の広島城は全焼する前に爆風によって吹き飛ばされた。燃えることによって記憶に刻まれる前に、消えて無くなってしまったのである。消失のプロセスを消された市民の情感は、再建に対する熱烈な要望とつながる。創建時との同一性を伴っていなくてもよい。展覧会用のハリボテ広島城天守閣が人気を博し、後に鉄筋コンクリートのレプリカとして再建された。

原爆ドーム

一方、今日原爆ドームとして知られる産業奨励館は、1915年、チェコの建築

家ヤン・レツルによって設計されて建設された。一九一四(大正四)年に物産陳列館として完成し、物産展示や美術展が頻繁に開催され、文化拠点としての役割を担っていた。中島を挟んで元安川側に設けられた玄関とドームの銅板の緑が都市景観を際立たせていた。セセッションの様式もさることながら、螺旋階段が取り巻く玄関の吹き抜け空間は、当時としては珍しいものであった。たとえ入ることはできなくても、憧れの対象として「市民」に愛された。

原爆投下によって、レンガ造の建物は爆心地が真上の上空であったために垂直の爆風を受けたことで倒壊をまぬがれた。一部の骨組みが残り、現在でも平和のモニュメントとして存立している。

２つの建物の履歴は対照的である。

表　二つの建築：広島城と原爆ドームの履歴

	広島城	原爆ドーム
戦中	伝統的木造	近代技術の鉄筋コンクリート
戦後	レプリカ	真正の廃墟
現在	眺望スポット	悲劇のモニュメント

生きられる建築

それでも、これらの建築に対する市民感情の履歴は、単純ではない。「市民」各々の記憶は多様である。往々にして、ある建物に反対の価値付けがなされる。

広島城について、「戦時中にあがってみましたよ。……好きなんですよ。お城を見たりするのが。」(筆者のＦ氏へのインタビュー)という活発な女学生もいれば、大人しい女学生は「楽しいもなにも、何をするところかわからんところですよね。宇品もね、連隊が多かったから。」(筆者のＨ氏へのインタビュー)と記憶する。

一方の原爆ドームについては、戦前からの好印象がある。「私はねぇ、原爆ドームが１番好きだった。あれグリーンのねぇ、きれいな色だったんですよ。ドームの屋根がね、抹茶の、色のちょっと濃いような緑でね。なんにも無い時代ですからそこ通るとね、他よりちょっと鮮やかだったかな。だから中はどうなっとるんかなって思って、目がそっちの方いってた。(電車から)すぐそばだから見えるんですよ。あれが、心癒してくれましたよ。」(Ｆ氏)に対して、「あれは好きでしたよ。あの中島ですからね。いろいろな展示品があるときには学校から引率してもらってね、あそこ見学しに行きよりましたよね。螺旋階段ですよね、あれ？あれ上がったら「お〜い。」って上から呼ぶけ、楽しかったですよ、あそこ入るのはね。」(Ｈ氏)という具合である。

感情移入は深く、もはや同化と呼ぶべきものに変わっていく。

「「原爆ドームはもぅ、お母さんの石碑みたいなんです私。あそこにね、川は

さんでね、窓から腰掛けてね、歌をよぅ歌いよったですがね。私が“シナの夜”なんか歌うたら、喜んでね、歌い手になれるいうてから喜んでましたよ。原爆ドームが見えるところでね。どうも私には懐かしいじゃなしに母の石碑のようなものです。」(H氏)

ところが、「母の石碑」という言いようもない原爆ドームに投影した母への愛着は、別の女学生にとっては違う姿を見せる。

「現在の復興は夢みたいなこと。でも原爆ドームには行きたくない。行けない。」(I氏)

それも戦後数年を経てから、突然にその場所で繰り広げられた様々な記憶が想起されてのことだという。人間が記憶を伴って生きているのと同じように、場所に存立する(存立した)建築も生きているのである。「あそこなんか行ったら、よぅ生き残ったねぇて思って、感心するくらい。そんなに懐かしいいうて入ったことはないんですけど、それよりも、よぅ生き残ったねぇ未だに生きとるんじゃねぇいうてそんな感じがします。なんかいとおしい。」(H氏)という愛着の感性は、何かをきっかけとして憎悪に裏返る。

4．建築の「遺産」と都市の「名所」の持続性

「遺産」の条件

場所の記憶の持続は、建築物の表象だけが問題ではないことは明らかである。

たとえばル・コルビュジエは、パリの都市に起立する様々な時代を証言するモニュメントに形態的連続性がないことをむしろ歴史の重層性ととらえ、自らの「輝く都市」の摩天楼もまた正当化しようとした。無論、偽物は論外である。

一方、広島城はレプリカでも再建を望む市民が戦後大多数を占めた。フェイクの偽善性と、本物であることを保証するための経済性とのあいだで苦悩する今日の復元事業からは、想像もできない事態なのかもしれない。

それでも、ル・コルビュジエの歴史的都市理論と広島に接点が見出せないわけではない。ノートルダム寺院にせよ、摩天楼にせよ、広島城にせよ、産業奨励館にせよ、建設当時、革新的な空間をその都市にもたらし、時間の波のなかで建築の「遺産」に転嫁したことは事実である。

「花見」の条件

「遺産」は性格上、多かれ少なかれ唯一無二の存在であり、永続的であることによってモニュメンタルな存在となる。あるいは逆に、有名無名にかかわらず、

建築の類型的形象のみが都市の持続性を保証するという理論もある。ところが、木造建築が支配する日本の都市では、むしろお祓い、御霊会、博覧会などの仕掛けが場所の持続性を保証する。とりわけ春の宴である「花見」が、特異な位置を占める。

「群木」「飲食」「群衆」によって構成される世界唯一の「花見」の場所において、人々は「桜」とともに「貴賤群衆」となり、場所と人が一体となって目に見えるもののはかなさと、この場所が持続していることに感じ入る。「群木」と「群衆」は他民族の花見文化にも認められるが、「飲食」を伴うことは世界的にも東アジアに限られた限定的な設えのようである。そこでは、食べるという生の根源的営みと、桜が散るという死の営みの象徴が重ね合わされる。ソメイヨシノによる同時発生的な群木の不自然な均質性や、「桜」がもたらすナショナリズム的イデオロギーなどはお構いなしに、桜は「花見」の場所として愛されているのである。

「名所」の持続

たしかに、社寺仏閣での花見、徳川吉宗の享保の改革による堤や御山や丘陵での花見、そして現代の花見に至るまで、その場所は単に桜が植樹された区画として「ゾーニング」されてきた。

たとえば、近代京都市における初めての「公園」は、東山山麓の円山の丘陵地である。江戸時代にはすでに名所として一段と賑わいを見せ、料亭や茶屋が繁盛していた。明治維新後も環境の変化はなく、京都博覧会に来遊する外国人の旅館、宿泊地もこの一帯にあり、料亭や茶屋の一部はホテルに転用されたものの、公園に名称が変わったところで実質的には行楽地として春には変わらず桜が舞い散っていた。もちろん観光客にのみに開かれていた場所ではない。嵐山も平安時代から紅葉や桜で有名であった場所であり、昭和初期には嵐山保勝会をはじめ民間の寄付により植樹が行われ、そこに嵐山電気軌道の都市開発行為が重なっている。

都市周縁の地だけではない。皇居を中心として皇族や公家の邸宅の集まる今日の京都御苑は、遷都以降、御所を除く九門内は一般庶民の通行が自由であったようで、食べ物屋がでる状態であったという。「苑内己ニ広ク地気最モ清シ加フルニ近来益々其保存修理ノ方ヲ立テラレ年々花樹ヲ増植シ梅林ニハ数千ノ梅樹アリ蓮池ニハ満池ノ芙蓉アリ—四時ノ観尽クル時ナシ」。明治年間の苑内は、今日まで変わらない。

軍事都市広島市においても、逆説的なことに、大正期の修学旅行などでも練兵場や兵器工廠への見学は必須であり、富国強兵と国家意識の高揚に役立てられた。広島城内の大本営跡や東西の練兵場などの軍事施設は第二次世界大戦末期の一時期を除いて、それほど閉ざされた施設ではなかった。むしろ遊郭の

ような施設だけが、軍事都市廣島では一般と市民からは秘された地区であった。こうして、江戸時代中期(18世紀)にまで遡ることの出来る広島城での花見は、今日まで持続している。

一方の平和記念公園は戦後に創設され、被爆者を追悼し平和を祈念する場所である。しかしこの場所は、純粋に神聖な「観光スポット」ではない。花見の場所となることもできる。むしろ平和を祈念するという20世紀の新しい経験が、死をも想起させる花見を呼び起こしたということもできるかもしれない。それは原子爆弾によっても消し得ない場所の持続、記憶を想起させる場所の持続の表象なのである。

はたして、近代的な「市民」としての互酬性は、土地＝貨幣所有神話へと移行する過程で失われていくのであろうか、「遺産」や「名所」は、観光商品化する過程において持続するのであろうか、憎悪を裏返しに持ち、しかし母の胸に抱かれた生身の人間の原初の場所への「愛着」は、変容を遂げて「故郷の喪失」へと至るのであろうか。少なくとも建築論としては、身体の本意と作意を問いたいと思う。

図　二つの花見：軍事拠点であった広島城（左）と原爆ドームを背景にした平和記念公園（右）

出典：筆者撮影